

Bleak House における「最後の審判」

吉田 一穂

1. 二つの語り

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) は、*Bleak House* (1853) において二つの語りを効果的に用いている。二つの語りとは、すなわち、三人称である全知者 (the Omniscient) の語りと、一人称のエスター・サマソン (Esther Summerson) による語りである。この二つの語りを用いることにより、ディケンズは、ミステリーである作品において、プロットを巧みに説明している。ダレスキー (H. M. Daleski) は、全知の語りの中心に上流社会のデッドロック夫人がいる一方で、一人称の語りの中心にはエスター・サマソンがいることを指摘しているだけでなく、二つの語りにおいて時間が異なっていることをも指摘している。すなわち、ダレスキーは、二つの異なる時間を全知の語りの歴史的に順序を追っていき現在と、一人称の語りの回顧的過去に分けて考えている。¹ ディケンズは、三人称の語りを現在時制にし、エスタの語りを過去時制にすることにより、ミステリーがエスタの出生と深くかかわっていることを印象づけている。エスタの一人称の語りに関して言えば、エスタの語りは過去時制であるので、作品は回想形式ということになるが、作品の始まり方に注目すれば、フィールディング (K.J. Fielding) が考えているように、² *Bleak House* をエスタ・サマソンの自伝的小説として読むことも可能である。しかし、作品はエスタの出生に関する事柄がプロットの最も重要な部分となっているので、作品を母親であるデッドロック (Deadlock) 夫人と娘であるエスタ・サマソンの関係性において考えてみる必要がある。すなわち、いかに両者が自分達の関係を知り、人間として救済されるかという観点から考え、全知者ディケンズの物語における意図がどこにあるか考えてみる必要があると言えよう。

ここで、作品に現れるイギリスの裁判所に目を移してみたい。ディケンズは作品において、イギリスの裁判所を批判している。ジャーディス (Jarndyce) 対ジャーディス事件が係累している大法官裁判所は、裁判の制度的な基盤が整備される以前の機能障害の極地の状態にあり、ディケンズの憤りを買った。³ ディケンズは、第1章で機能麻痺に陥ってしまった大法官裁判所を描写し、裁判が各種の裁判所によって、コモン・ローとエクイティ、さらにローマ法という異なる法源に依拠しながら、別個、ばらばらに行われているがゆえに、裁判所間での事件のたらいまわし (circuity of action) が行われていることに言及している。⁴ ジャーディス対ジャーディス事件もまた、このような制度的な基盤が整備されて

いないがゆえの裁判の混乱に巻き込まれてしまっている。⁵ ジャーンディス氏が第8章で説明しているように、もともとこの事件は、ジャーンディス氏の大伯父のトム・ジャーンディス氏の遺言書に関する事件であった。しかし、ジャーンディス氏の遺産は、遺言にもとづく信託財産をどう処分するかという問題で使い果たされ、遺言受取人たちは、すっかり零落してしまったのである。⁶ 注目すべきことは、ディケンズが第3章でミス・フライト(Miss Flite)の言葉により、聖書の黙示録で言っている第6の封印(the sixth seal)と大法官の保持している国璽を関連づけていることである。⁷ さらに重要なことは、ディケンズが第3章の初めに、エスタの生い立ちを語った後でミス・フライトにジャーンディス事件について語らせ、「最後の審判の日」(the Day of Judgment)(33)と言わせていることである。このことから、大法官裁判所を批判するためだけにディケンズがジャーンディス対ジャーンディス事件を作り出したのではなく、語りにおける全知者として事件を登場人物の運命と関連づけることにより、読者に登場人物にどのような審判が下されるかを強調していると考えられる。作品の主人公エスタに関して言えば、彼女は、ジャーンディス対ジャーンディス事件の当事者であるジャーンディス氏の被後見人となるが、ディケンズは、大法官裁判所における審判と登場人物エスタの終局的運命に関する審判を巧みに関連づけていると言える。「語る」という行為は、共同性を強くもった言語活動であって、「語り」は聞き手に対してより優越した立場からある種の規範性や聖性をもって下される発話である。このような「語り」の性質から *Bleak House* を考えると、非嫡出としてのエスタの物語は、彼女が人生の出発点で非嫡出というマイナス面を背負うにもかかわらず、最終的にそのマイナス面を克服し、精神面において救われる物語であり、ディケンズは、宗教的アレゴリーとまではいかないまでも、エスタの物語を「最後の審判」という言葉を用いることによって印象的に描いていると言えよう。本論文では、全知者としてのディケンズがエスタの出生と深く関わっているミステリーである作品において、いかなる意味で「最後の審判」という言葉を用いたかということについて述べたい。

2. エスタの生い立ち

まず、エスタの生い立ちについて考えていきたい。非嫡出のエスタは、ものごころついて以来、養母のミス・バーバリ(Miss Barbary)に育てられる。このミス・バーバリは、毎日曜日3度、朝の祈りのため水曜日と金曜日、そして、講話のたびに教会へ行くほど厳格で信心深い女性である。彼女は、エスタを罪と天罰をうけて生まれてきた人間だとし、エスタに服従・克己・勤勉を強いる。ミス・バーバリに育てられている間、エスタにとって最も悲しい日は、誕生日である。友達の誕生日には、皆それぞれの家で誕生日を祝うのだが、エスタの場合には、そういうことがないのである。エスタは、陰鬱な目をして自身を眺めている養母の顔に「エスタや、おまえは誕生日なんかなかったほうが、生まれてなんかこなかったほうが、どんなによかったか知れないのに」(17)という言葉を読み取る。す

なわち、エスタは、非嫡出の生まれであることにより「墮落した」存在であると決めつけられてしまっているのだ。パム・モリス (Pam Morris) が指摘しているように、アイデンティティーの核心を形成するものとして描写されているエスタの人生初期は、見捨てられた、他者とは異なっている、分離されている、という自己の感覚を生み出している。⁸

リード (John R. Reed) は、ミス・バーバリのエスタに対する言葉、すなわち、「お前のように暗い影をになって生まれた者がこの世の中で生きてゆくには、まずその前に克己と勤勉とを身につけなければならない」という言葉に、本当のキリスト教徒は救いを得るため自らの意志を神の意志の前に服従させなければならない、というスローガンを読みとる。⁹ 神に対する畏怖や天罰の可能性を強調するミス・バーバリの宗教は厳格であるが、イエス・キリストの示す赦しとは対照的である。ミス・バーバリの宗教は、カルヴィン主義的でなくとも子供に復讐の恐怖や可能性を強調していることから、*Little Dorrit* (1857) で自身の復讐計画のため、アーサー (Arthur) に厳格な教育を行うクレナム (Clennam) 夫人の宗教と似ている。両者とも罪のない子供に、誤ったキリスト教解釈に基づく厳格で精神を束縛する教育を行う点で類似した人物と言えるのだ。

ある晩エスタは、聖書を養母の前で朗読する。エスタが読んだ聖書の箇所は、ヨハネによる福音書の、人々が姦淫の罪を犯した女を主イエスのところに連れてきたときに、主がそしらぬ顔で身をかがめて地面に指で字を書くという箇所である。エスタが「かれら聞いて止まざれば、イエス身を起こして、なんじらの中、罪なき者まず石をなげうて」(John 8 : 7) という箇所を読んだとき、養母が立ち上がり、すさまじい声を張り上げて聖書の全然別な箇所を言い出す。その箇所とは、「この故に目を覚ましおれ！おそらくは、家の主人にわかにかに帰りて、汝らの眠れるを見ん。わが汝らに告ぐるは、凡てのひとに告ぐるなり。目を覚まし折れ！」(Mark 13 : 35-37) という箇所である。

ここで、注目すべきことは、エスタが読む箇所がイエスの赦しを示す箇所であり、ミス・バーバリの言う箇所が終末の前兆とイエスの再臨に関する箇所であることだ。マルコによる福音書第 13 章で、弟子たちが終末の前兆について尋ねると、イエスは、「その時、誰かがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、『見よ、あそこにいる』と言っても、それを信じるな。にせキリストたちや、にせ預言者が起こって、しるしと奇跡とを行い、できれば、選民を惑わそうとするであろう」(Mark 13 : 21-22) と言っているが、亡くなる前にイエス再臨に注意を促す箇所を述べることにより、ミス・バーバリは、皮肉にもエスタの以後の人生に、たとえ自身の信奉するような誤った宗教に出くわすことがあったとしても、イエス・キリストによる導きがあることを暗示しているかのようである。

スコット (P.J.M. Scott) は、デッドロック夫人が自身の人生をヴィクトリア朝時代のレスベクタビリティーによって考えられるところの“fallen woman”としての人生であると想像する、と述べているが、¹⁰ エスタが読む人々が姦淫の罪を犯した女をイエスのところに連れてきたとき、イエスがそしらぬ顔で身をかがめて地面に指で字を書いているという箇所は、ディケンズが *David Copperfield* (1850) でハム (Ham) を裏切りスティアフォース (Steerforth)

に走ったエミリー (Emily) を捜し出した後ペゴティー (Peggotty) 氏が言う言葉にも見られ、¹¹ この箇所によりディケンズが *Bleak House* においてモチーフとしての「罪の赦し」を印象づけていると言っていいだろう。ここでは、非嫡出の生まれであることにより罪深い存在であると思ひ込んだエスタが「罪の赦し」を心の中で求めていると考えられる。このような「罪の赦し」のモチーフはディケンズの作品にのみ見られるわけではない。例えば、エリザベス・ギaskell (Elizabeth Gaskell, 1810-65) の *Ruth* (1853) にもまた「罪の赦し」のモチーフが見られる。

この作品において、ルースは彼女の美貌に心を奪われたヘンリ・ベリンガム (Henry Bellingham) に誘惑されるが、彼に捨てられる。結果として、ベリンガムとルースの子供であるレナード (Leonard) は私生児となる。"fallen woman"としてのルースに対し破廉恥な女性と考え、よくも自分の娘たちの家庭教師にしてくれたものだと、怒りをあらわにするブラッドショー (Bradshaw) 氏に対し、教会の牧師であるベンソン (Benson) 氏は、「今わたしが神の真理と信じていることを、十分な説得力をもって語るができるよう、神にお願いしたい。その真理とは、道を踏みはずした女が、すべて墮落しているわけではないということです。犯した罪を悔やみながら、悲嘆にくれている哀れな者たちを、地上で見殺しにした人々は、最後の審判の日 (the Great Judgment Day) に、あやまちを犯したいかに多くの者が有徳の世界に戻る機会を渴望していたが、ただ一人の人間も与えてくれない援助を一あのイエスがかつてマグダラのマリアに与えたもうた心やさしい援助 (that gentle tender help which Jesus gave Mary Magdalen) —をいかに渴望していたか、その実態を明かされるでしょう。」(288) と言う。このベンソン氏の言葉により、ギaskell は *Ruth* において「最後の審判」を登場人物の運命と関連づけ、「罪の赦し」の意味を読者に示していることは明らかである。しかし、ディケンズが *Bleak House* において使っている「最後の審判」は、意味においてより多様性を感じさせる言葉である。また、デッドロック夫人に実質上の罪がないことから、*Ruth* の場合とは異なる意味合いを持つ言葉となる。

フィリップ・ホブスバウム (Philip Hobsbaum) が指摘しているように、¹² *Bleak House* においては、誇り高いデッドロック夫人が彼女の元の愛人を知らない准男爵と結婚するということが、作品のプロットの最も重要な部分を占めているが、ディケンズはジャーディス対ジャーディス事件による裁判と人間に下される審判とを全知者の立場から巧みに関連づけている。ミス・フライトは、屋根裏部屋に小鳥を飼っているが、彼女は、自身が小鳥を飼い始めた目的は、自由の身に帰してやるためであると言う。そして、自身の運命について、「私はときどきほんとうに心配になるのですが、事件がまだ解決しないで、黙示録の第六の封印 (sixth or Great Seal) 、つまり大法官の保管している国璽がまだ勢力を占めているあいだ、私がいつかそのうち、ここで硬く冷たくなっているのじゃないかしら、今までに見て来たたくさんの小鳥たちと同じように!」(55) と語る。

ディケンズが「籠に閉じこめられた鳥」の比喩を用いるのは、*Bleak House* が最初ではない。すでに *The Old Curiosity Shop* (1841) において、ディケンズは主人公ネル (Nell) の

状態を「籠に閉じこめられた鳥」の比喻を用いて表現している。ネルがロンドンの家から逃避する際に現れる「籠に閉じこめられた鳥」は、彼女の死の際にも現れ、ネルを象徴しているかのようである。この作品において、「籠に閉じこめられた鳥」は、地上の牢獄に閉じこめられた天上的な魂のメタファーとしての意味を持っている。一方、*Bleak House* では、ミス・フライトが鳥によって暗示しているものは、大法官裁判所に影響を受けて自由になれない人々であるが、それはエスタの運命とも無関係ではない。第14章でエスタは、ミス・フライトの屋根裏部屋を訪れるが、そこで彼女は、ミス・フライトを親身に診察していた医者、ウッドコート（Woodcourt）と会い、エスタは、ミス・フライトに、彼のことを「国じゅうのお医者さんたちの中で一番親切な先生よ。」(198)と聞き、「もうじき裁判が下るはずです。裁きの日に。そうしたら財産をあげるつもり。」(198)と聞くからである。このことは、プロットの中で重要な意味を持っている。すなわち、エスタは最後にウッドコートと結婚するが、エスタの結婚相手のウッドコートは、道徳的に立派な人間であり、最後の審判においても良い審判が下されることを暗示しているからだ。このことから、ディケンズが最後の審判によって、登場人物にもたらされる裁きをも暗示していると考えてよからう。大法官裁判所とその影響を受ける人々は、ディケンズによって象徴的に描かれている。ジャーディスが籠の中の小鳥について尋ねたとき、古船具商・廃品回収業者の老主人クルック（Krook）は、片手に毛皮の帽子を持ち、すぐうしろに猫を従えて現れる。猫を見たフライトは、「猫を下へいかせなさい。追い払いなさい。」(199)と腹立たしげに叫ぶ。「ふん、ふん！ - なにも、あぶないことはありません、みなさん、わしがここにいや、こいつは鳥をねらったりしませんや、ねらえていわないかぎりね」(199)と言う。自身のことを「ご承知の通りわしは大法官だ」(199)というクルックと彼の猫は、ジャーディス対ジャーディス事件に一族として関わりを持つジャーディスに対し、餌食にしようとして待ち構えているかのように描かれている。クルックは、フライトお婆さんに代わって鳥の名を全部呼びあげると、希望から始まり絶望を経てたわごとで終わる鳥の名前は、ジャーディス対ジャーディス事件をめぐる大法官裁判所による裁判が、希望に満ちた裁判から絶望的な状況に陥り、最終的に馬鹿馬鹿しい結果をもたらす裁判以外のなにものでもなくなったことをよく説明している。大法官裁判所の前に店を構えるクルックは、後に「自然発火」(Spontaneous Combustion)により死んでしまうが、彼の運命は、大法官裁判所の影響を受け判決を待たずに死んでいく人間の運命を象徴している。注目すべきことは、かつてクルックの家の二階でエスタの父親であるホードン大尉がラテン語で「誰でもない」という意味のネモ（Nemo）という名前を用いて法律代書人をしている際、阿片の飲みすぎで死んでいたことだ。三階にいるフライトお婆さんは、その際医者のウッドコートをつれてくるが、後にホードン大尉の身元が判明し、エスタがデッドロック夫人を母親であると知った後、非嫡出であるにもかかわらずエスタがウッドコートと結婚することを考えると、ディケンズは、「飛び立つこと」(flight)や「脱出」を発音の上で意味する名前を持つフライトお婆さんの鳥、すなわち、将来大法官裁判所から解放されて人々が自由になってほし

いというフライトお婆さんの願望がこめられた鳥により、将来解放されるであろうエスタの運命をも暗示していると言えよう。次にエスタの出生と直接関係のあるデッドロック夫人について考えていきたい。

3. デッドロック夫人とエスタの接点

ポール・デイヴィス (Paul Davis) は、ディケンズが二つの語りを用いていて、その二つの語り が法律と上流社会の世界における公的生活を報告する三人称の語りと個人的な物語を語る若い女性エスタ・サマソンの一人称の語りである、と述べている。また、彼はこの二つの語りを用いてディケンズの家庭的な物語と公のできごとを関連づけている、と説明している。¹³

デイヴィスの説明しているように、この二つの語りは、最初平行に進んでいくが、プロットの中で、上流社会のデッドロック夫人と荒涼館の住人であるエスタが期せずして会う場面がある。それは第 18 章においてである。エスタは、ジャーディス氏の友人ボイソーン (Boythorn) のところへやって来、皆でデッドロック家の獵園の中にある小さな教会へ行く。礼拝式が始まる時、エスタは、「汝のしもべの審判にかかずらいたもうなかれ、エホバよそは聖前に—」(249) という言葉を聞くが、その直後、彼女は美しくも誇り高い目が自身の目を見ているような感じを受ける。この目は、エスタの実の母親デッドロック夫人の目なのであるが、エスタは視線を聖書に落したとき、その顔に見覚えがあると思う。そして、エスタは、養母の家で送った孤独な日々を思い出す。エスタは、自身の不安を忘れるため、聖書の言葉に注意を向けるが、その言葉はまるで養母の声のように聞こえる。エスタは、デッドロック夫人の顔にいまだかつて見たことのない高慢さ、傲慢さを見るが、デッドロック夫人と自身との関連性を次のように表現している。

And yet I—I, little Esther Summerson, the child who lived a life apart, and on whose birthday there was no rejoicing—seemed to arise before my own eyes, evoked out of the past by some power in this fashionable lady whom I not only entertained no fancy that I have ever seen, but whom I perfectly well knew I had never until that hour. (250)

引用に見られるように、デッドロック夫人の顔を見て、エスタはかつての誕生日になんの祝いもしてもらえなかった自身の姿を思い出すが、ディケンズは、エスタの意識の流れを巧みに描き出すことにより、両者の血縁関係を暗示している。作品の最初、上流社会のうわさの的となり、上流社会という木の頂上にいる、と描写されているデッドロック夫人は、自身を征服する世界がなくなり泣いたアレキサンダー大王と比較し、冷やかな気分になったと描かれていて、非嫡出のエスタとは全く接点がないように見えるが、両者の関係は、読者に徐々に明らかにされる。ディケンズが両者の真実の関係を読者に解かりやすく

説明するのは、ガッピー (Guppy) の口を通してである。第 29 章において、ガッピーは、エスタ・サマソンの生まれと育ちに関し、生前ミス・バーバリが自身が育てた女の子の本名がエスタ・サマソンではなくて、エスタ・ホードン (Hawdon) であると話していたことをデッドロック夫人に伝える。さらにガッピーは、大法官府横町近くのクルックという男の家で、非常に窮迫した代書人が死んでいたこと、代書人の名前がホードンだということ自身が発見したこと、変装した貴婦人が現れ、道路掃除人をしている少年を雇って案内をさせ、ホードンの墓を見に行ったこと、を伝える。この貴婦人とはもちろんデッドロック夫人であり、道路掃除の少年とはジョーであるが、読者は、エスタとデッドロック夫人の間でジョーが重要な役割を果たしていることに気づかざるをえない。ディケンズは、荒れ果てたトム・オール・アローンズ (Tom-all-Alone's) に住んでいるこの階級的には底辺に居るジョーにより、エスタとデッドロック夫人を関連づけている。浮浪者や一泊一ペニーの泊り客の巣となっているトム・オール・アローンズに住んでいるジョーは、いわば、社会的に無視された存在である。犠牲を象徴するジョーは、アンガス・ウィルソン (Angus Wilson) が指摘しているように、¹⁴ 見捨てられ、狩りたてられ、死に追い込まれた人間の姿を表していて、ディケンズにおけるさまよえる孤独な子供のイメージの最たるものと言えよう。そして、ジョーのさまよえる孤独な子供のイメージを非嫡出であるエスタも読者に与えることから、両者は一致点を見出すのだ。

罪の償いという観点から考えると、デッドロック夫人がホードンの墓を訪れることは、罪の償いとしての意味を持つと言えるが、後にエスタは疫病を発生させる恐れのあるロンドンの墓所から、ジョーが運んできた天然痘 (small pox) にかかってしまうので、我々はデッドロック夫人の罪が子供にまで及んでしまっているような印象を受ける。¹⁵ 病气から回復した後、最初に鏡を見ると、エスタは自身の姿を次のように表現する。

There was a little muslin curtain drawn across it. I draw it back: and stood for a moment looking through such a veil of my own hair, that I could see nothing else. Then I put my hair aside, and looked at the reflection in the mirror, encouraged by seeing how placidly it looked at me. I was very much changed—very, very much. (504)

ここで注目すべきことは、エスタのアイデンティティーを象徴的に示すため、ディケンズが鏡を用いていることだ。自身の姿は自分には見えないが、他者には見える。もし見ようとするならば、鏡を用いて見ることができる。エスタが鏡を用いて見る顔にできた傷は、彼女が私生児の子供として生まれてきたという生い立ちを暗示している。しかし、ディケンズは、傷によって単にエスタが私生児であることを暗示しただけではなさそうだ。エスタは、かつて養母に罪と罰を受けてきたと言われるが、ディケンズは、第 3 章でエスタに「私は疑う余地もなくその罪に責任を感じていながらも、それは自分の責任でないという気がしました」(18) と語らせていることにより、エスタが明らかに自分の意志で私生児と

して生まれたのではないと感じていることを示している。エスタの傷は、言わば、聖書の「ヨブ記」に出てくるヨブの腫物の如きものであると言えよう。「ヨブ記」では、何の罪もないヨブが幸福な生活を送っていたが、突然理由のわからない災いに見舞われる。地上のヨブは、神の計画を知らずに苦しむが、神への信仰を守りとおす。もともと、この物語は、神とサタンの賭けが原因であった。「ヨブ記」は、神の前に天使たちが集まるところから始まる。その中にサタンもまじっていた。議論が進むうちに、サタンは神を賭けに誘い込む。ヨブを不幸に陥れて神を呪わせようというのである。ヨブの牛が略奪され、羊が殺されただけでなく、息子や娘たちも死んでしまう。それだけでなく、彼自身も恐ろしい腫物に悩まされる。しかし、彼は神を呪うことを拒否する。その結果、最後に神は、ヨブに繁栄をもたらすが、ヨブの運命は、自由意志により運命を切り開いたエスタの運命と重なり合う部分がある。意思決定の際、自身を取り巻く状況にもかかわらず、神を信じる点が両者の一致点である。¹⁶ エスタの場合、傷は、私生児であることの象徴の如きものだが、彼女は自身の性格や逆境に負けない生き様により幸福をつかむことにより、私生児であるという人生のマイナス面をぬぐい去っている。さらに、後に母親が赦しを乞う際も、神の摂理のありがたさにエスタは心を打たれる。すなわち、エスタは、自身の顔かたちに変化してしまったことが幸いして、顔が似ていることで母親に恥ずかしい思いをさせないですむ、と考えるのである。このことから、エスタの意志決定は、究極的には、エスタの性格によるものだと言ってよかろう。第 23 章でフランス人の侍女であるオルタンス (Hortense) がエスタを訪ねてくるが、この際デッドロック夫人が自身にとって気位が高すぎた、自身をやさしく、教養が深く、美しいエスタの召使にしてほしい、と訴えるオルタンスの言葉は、両者の性格の対照性と性格が他者に与える影響力を示している。また、エスタが第 44 章でジャーディス氏から受け取る手紙には、エスタを荒涼館の主婦として迎えたいという意向が書かれているが、エスタは、手紙には書かれてはいないこと、すなわち、ジャーディスが自身の顔の傷も生まれながら背負った私生児としての境遇も問題でないことをも読み取る。このことにより、ジャーディス氏がエスタの人間性を高く評価していることは明白であろう。一方で、タルキングホーン (Tulkingshorn) に自身の秘密を知られたデッドロック夫人は、彼に心理的に支配され恐怖を抱いている。家名が汚されるという恐怖をタルキングホーンに植えつけられながらも、自然の感情をおし殺すことと良心の呵責に耐えかねたデッドロック夫人が逃亡することもまた、彼女の心理状態を考えれば当然のことと言えよう。このように、ディケンズは劇的プロットに依存しつつも、性格が他者に与える影響と登場人物の心理状態を巧みに描きだしていると言っていい。

4 . デッドロック夫人のレスペクタビリティからの解放

ここで、ディケンズがエスタの心理状態を彼女の行為によって象徴的に描き出していることに注目したい。第 36 章でエスタは、鏡で自身の変わりをはてた顔を見、その後、母親で

あるデッドロック夫人に会うが、鏡を見るという行為は、デッドロック夫人が、「おお、私の娘、私の娘、私はお前の罪深い不幸な母親なのよ。どうか私を赦しておくれ」(509)と叫び、苦しそうにエスタの前の地べたにひざまずき、母親としての心情を吐露するとき、象徴的意味を帯びる。さらに、デッドロック夫人が、「私はこれまで愚行を重ね、傲慢に傲慢を重ね、沢山の虚栄に一層の虚栄のうわ塗りをして来たわ」(512)、「きらびやかで、華やかで、崇拜者に囲まれているレスタ卿夫人のうわさを聞くことがあったなら、その仮面の下には良心の呵責にさいなまれている、みじめなお前の母親がいるのだ、とっておくれ！」(512)と言うとき、その象徴的意味は強められる。すなわち、ディケンズは、鏡によりレスペクタビリティを保つことの意味を表している。エスタの傷は、彼女が私生児であることを示しているかのようであるが、彼女が子供時代に感じるように本来の彼女自身には罪はなく、無傷であり、事情はどうだったとしてもデッドロック夫人を母親に持つことに変わりはない。一方、デッドロック夫人にとってもレスペクタビリティを保とうとするならば、エスタがホードン大佐の子供であることは、隠蔽すべき事実であるが、仮面といってもいい社会的な顔の裏には、真実の顔が隠されている。つまり、鏡は、仮面の顔の背後の真実の顔を表現するために用いられていると言ってよかろう。デッドロック夫人にとってレスペクタビリティを保ち続けることは本来の自己でない自己になりきることであるが、もし彼女が本来の自己を偽り続けたとしても、それは自身の自然な状態に逆らうこととなる。第59章でエスタは母親からの手紙を読むが、そこにはデッドロック夫人が良心の呵責に苦しんでいることと、エスタに赦しをこう心情が書きつづられている。最後にデッドロック夫人は、恐ろしい旅の果てに、気味悪く墓がひしめいているロンドンの墓地にあるホードンが眠る墓へとやってきて息絶える。

宝石類や持ち金を残し、夫の元から逃亡したデッドロック夫人の行為は、罪の償いとしての意味もあるが、積極的意味を持つ行為であるとも言える。それは、自身の自然な状態に戻ることを意味するため、後天的自己からの「解放」と言ってもいいものである。ディケンズは、デッドロック夫人の逃亡から死へと至る過程を描くとともに、エスタが非嫡出であるにもかかわらず幸福をつかむ過程を描くことにより、エスタの解放を印象づけている。エスタは最終的にウッドコートと結婚するが、ディケンズはジャーディス事件と「最後の裁きの日」について語るフライトお婆さんにウッドコートについて語らせている。このようなフライトお婆さんは、またエスタにウッドコートのインドでの慈愛と勇気に満ちた行為について語る。フライトお婆さんは、インド洋での難破では何百人という死人や瀕死の患者が出たが、ウッドコートが多くの命を救い、飢えと渇きにもぐちをこぼさず、多くの命を救い、飢えと渇きにもぐちをこぼさず、自分の着物を他人に与えたこと、率先して模範を示し、指揮をとり、病人を看護し、死者を葬り、最後には生き残りを無事陸地へと導き、皆がこの行為を示したウッドコートを神のように崇拜したことを語る。

このような救済者としてのウッドコートの姿は、第47章にも見られる。この章の最後でジョーが死にかけているとき、ウッドコートは彼と祈ろうとする。パート・G・ホーンバツ

クは、「天にましますわれらの父よ」と言う際、ジョーが自身が知らない神に祈らず、この世で知っている最初の父すなわち、小説における善良な人間ウッドコートに対して祈る、と指摘しているが、隣人愛の持ち主であるウッドコートは、孤児で貧しい労働者の子供であるジョーにとって救済者といっていい人物である。ジョーは、かつてスナグズビーの家で説教者チャドバンド (Chadband) が祈っていたのを聞いたが、独り言を言っているみたいだった、と言うが、このことは、チャドバンドの説教が長口舌にとどまり、他者を救う力とは無縁のものであることを示している。一方、ジョーとともに祈り彼の最後を看取るウッドコートは、チャドバンドとは対照的に行動により他者を救済する人物と言える。

ディケンズは、このようなウッドコートの救済者としての姿を印象づけるとともに、作品の最後で人間の「解放」を印象づけている。第 64 章で、エスタは後見人であるジャーンディスと結婚する予定であったが、ジャーンディスは、ウッドコートの母親にウッドコートとエスタは愛し合っているが、自身への義務感から恋心を犠牲にしようとしている、と説明し、エスタをウッドコートに譲り渡す。この章で、ディケンズはエスタの義務感からの「解放」を印象づけているが、さらに次の第 65 章で一層強く「解放」を印象づけている。大法官裁判所の犠牲者となったリチャード・カーストン (Richard Carstone) は死ぬ前、新たに出直すと言う。ディケンズは、痛々しくまた皮肉な感じでリチャードが出直すのが遅すぎ、この世ではなく、この世のあやまちも悲しみも、すべてを直してくれるあの世で出直さなければならないことを嘆く。それは、ホーンバックの述べているように、この世が完全によくなれないという暗いリアリズムともとれるが、¹⁷ フライトお婆さんがエスタのところへやって来て、小鳥を全部放してやったわ、と告げることにより、我々は希望に満ちた新しい始まりを予感するのだ。ここで、ディケンズは、リチャードの天に召される運命を、フライトお婆さんの鳥、すなわち、地上の牢獄に閉じこめられた天上的な魂のメタファーと関連づけることにより、人間が地上の苦しみから解放されることを読者に印象づけている。

天国へ旅立ったリチャードと対照的に、エスタはウッドコートと結婚し、地上で家庭的幸福を得る。ここで、*Bleak House* という作品のタイトルについて考えられることは、ディケンズが、作品のタイトルに象徴的意味を持たせたのではないかということだ。その象徴的意味とは、*Bleak House* がジャーンディス氏の屋敷を意味するだけでなく、エスタの人生初期において、彼女が非嫡出であり、家庭的に荒涼とした状態であることをも意味しているのではないかということだ。一方で、社会的地位のためにデッドロック夫人がホードンを裏切るということを考えると、作品を包括的な社会的諷刺ととらえることも可能であり、*Bleak House* は荒涼としたイギリスを象徴しているとも考えることもできる。作品は、エスタがそのような荒涼とした状態から抜け出し、家庭的幸福を得る物語、すなわち、孤児のシンデレラ物語と言ってもよからう。

エスタが非嫡出という生まれから家庭的幸福を得る過程において、彼女自身の性格、すなわち、家庭的で、野心的でなく、節度がある性格が深く関係していることは言うまでも

ない。エスタは、'domestic angel'であることから、アンドリュー・サンダース(Andrew Sanders)が考えているように、¹⁹ フローレンス・ドンビー (Florence Dombey)、アグニス・ウィックフィールド (Agnes Wickfield)、エイミー・ドリット (Amy Dorrit) など同類の女性ととらえることができる。²⁰

エスタは、作品の最後でウッドコートとの生活について次のように語る。

We are not rich in the bank, but we have always prospered, and we have quite enough. I never walk out with my husband, but I hear the people bless him. I never go into a house of any degree, but I hear his praises, or see them in grateful eyes. I never lie down at night, but I know that in the course of that day he has alleviated pain, and soothed some fellow-creature in the time of need. I know that from the beds of those who were past recovery, thanks have often gone up, in the last hour, for his patient ministrations. Is not this to be rich? (879)

引用に見られるようにディケンズは、作品の最後でエスタが金持ちではないが、困っている同胞に手を差し伸べる夫と結婚できて満ち足りた様子を描いている。この引用は、聖書のマタイによる福音書第 19 章を彷彿させる箇所である。ある青年がイエスに近寄ってきて、「先生、永遠の生命を得るためには、どんなことをしたらいいでしょうか」と尋ねる。イエスは、それにはいましめを守ることだと言う。「どのいましめですか」と尋ねる青年にイエスは、「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな、父と母を敬え』。また『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』』と。いましめはみな守ってきた、他に何が足りないかと尋ねる青年にイエスは、「もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物を売り払い、貧しい人に施しなさい。そうすれば天に宝を持つようになる」と言う。さらにイエスは、「富んでいるものが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」と言う。(Matthew 19 : 16-24) 銀行預金は豊かではないが、困っている同胞に手を差し伸べるウッドコートとその助けとなるエスタの行為は、イエスの言う天に宝を積む行為であるといえよう。

Bleak House においてディケンズは、ジャーディス対ジャーディス事件により、機能麻痺に陥ってしまった大法官を批判するだけでなく、もともとの原因である遺産によってのみでは人間は幸福になれないことを示す。またディケンズは、上流社会の住民であるというレスペクタビリティから解放され自然な自分に戻り、エスタの母親としての自分自身をとり戻し赦しを乞うデッドロック夫人を示すことにより、いかに人間にとって良心が大切かを訴えている。さらにディケンズは、最後に非嫡出という生い立ちを克服し、ウッドコートとの結婚という幸福を得るエスタを示すことにより、人間は金の有無や階級ではなく、隣人愛の有無や内部に秘められた個人によって裁かれるべきだという自身の考えを訴えている、と言っていい。

フォースター (E. M. Forster) は *Aspects of the Novel* の中で、小説の特性は、作家が作中人

物を通じてだけでなく、彼らに関しても語りうる、つまり彼らの「自己との対話」を我々が聴きうるように取り計らえるということである、と述べ、作家は彼らの「自己との対話」に迫り、その水準からさらに深く潜在意識を表現できる、と指摘している。^{2,1} *Bleak House* においてディケンズは、ジャーネディス対ジャーネディス事件の裁判と関連づけて「最後の審判」という言葉を用いることにより、登場人物の潜在意識にある因果律（善因善果、悪因悪果）への畏怖を表現し、小説の結末を効果的にしたとっていいだろう。

注

- 1 H.M. Daleski, *Dickens and the Art of Analogy*. 157.
- 2 K.J. Fielding, *Studying Charles Dickens*, 174.
- 3 戒能通厚、広渡清吾、『外国法』, 103.
- 4 *Ibid.*, 103.
- 5 制度的基盤が整備されるのは、1883年の「裁判所法」を待たなければならない。高等法院は、「衡平法部」(the Chancery Division)、女王座部(the Queen's Bench Division)、「人民訴訟部」(the Common Pleas Division)、「検認、離婚および海事部」(the Probate, Divorce and Admiralty Division)の5つの部によって発足したが、「裁判所法」の画期的な点は、異なる法源に依拠しながら、別々に行われてきた裁判を、高等法院という大きな屋台の下で統一して行うようにすることにより、たらいまわしを回避し、法体系の統一をはかろうとしている点である。(『外国法』, 103)
- 6 ディケンズは、訴訟関係者であるジャーネディスの口をかりて、大法官裁判所を次のように批判している。

‘We are always appearing, and disappearing, and swearing, and interrogating, and filing, and cross-filing, and arguing, and sealing, and motioning, and referring, and reporting, and revolving about the Lord Chancellor and all his satellites, and equitably waltzing ourselves off to dusty death, about Costs. (95)

Equity sends question to Law, Law sends questions back to Equity; Law finds it can't do this, Equity finds it can't do that; neither can so much as say it can't do anything, without this solicitor instructing and this counsel appearing for A, and that solicitor instructing and that counsel appearing for B; and so on through the whole alphabet, like the history of the Apple Pie. And thus, through years and years, and lives and lives, everything goes on, constantly beginning over and over again, and nothing ever ends. And we can't get out of the suit on any terms, for we are made parties to it, and must be parties to it, whether we like it or not.

(95-96)

- 7 大法官裁判所とは、もちろん大法官が主宰する裁判所であるが、大法官という役職は、その起源を尋ねれば、決して裁判官職でなく、むしろいわば行政官であった。すなわち、その職務は、勅許状や訴訟開始のための令状など、国の名で出される文書の起草・発給にあたることにあり、そのことにより、その役職が、国璽または大璽 (Great Seal) という、国王の地位を象徴する印の保管者、すなわち国璽尚書 (Keeper of the Great Seal) であることに象徴されるものと考えられることになった。(『外国法』、104.)
- 8 Pam Morris, “*Bleak House* and the Struggle for the State Domain”, in *ELH* (Vol.68.) , 693.
- 9 John R. Reed, *Dickens and Thackeray: Punishment and Forgiveness*, 209.
- 10 P.J.M. Scott, *Reality and Comic Confidence in Charles Dickens*, 62.
- 11 次は、エミリーを捜し出した後のペゴティー死の言葉である。

‘I took my dear child away last night,’ Mr. Peggotty began, as he raised his eyes to ours, ‘to my lodging, where I have a long time been expecting of her and preparing fur her. It was hours afore she knowed me right; and when she did, she kneeled down at my feet, and kiender said to me, as if it was her prayers, how it all come to be. You may believe me when I heerd her voice, as I heerd at home so playful—and see her humbled, as it might be the dust our Saviour wrote in with his bleesed hand—I felt a wownd go to my art, in the midst of all its thanfulness!’

[Charles Dickens, *David Copperfield*, 725,]

- 12 Philip Hobsbaum, *A Reader’s Guide to Charles Dickens*, 153.
- 13 Paul Davis, *Dickens Companion*, 37.
- 14 Angus Wilson, *The World of Charles Dickens*, 233.
- 15 ロバート・ニューサム (Robert Newsom) は、「*Bleak House* には、汚染が至るところに見られ、基調になっていると言ってもいいほどである。ロンドンには、至るところ汚染されていて、不快である。(19 世紀中頃、ロンドンの住人は、テムズ川に汚水を注ぎこんだにもかかわらず、テムズ川から飲み水をとった。) また、ロンドンのひどい公衆衛生は、貧乏人だけでなく都市の住人をも脅かした。」と述べている。 [Robert Newsom, *Charles Dickens Revisited*, 113.] 天然痘については、エドワード・ジェンナー (Edward Jenner, 1749-1823) が種痘を発見して以来、イギリスでは天然痘が下火となったが、公衆衛生にあまり理解を持たず種痘を受ける機会のない貧乏人の中には、依然として定期的に発生していた。しかしながら、1837 年から 1840 年まであまりにも種痘が流行したので、議会は下層階級の人が無料で種痘を受けられる 1840 年の種痘法を承認した。 [James Hill, “Vaccination and Smallpox ”, in *Victorian Britain: An Encyclopedia*, 832-33.]

- 16 ジャネット・ラーソン (Janet Larson) はエスタを信仰に生きるヨブと重ね合わせて考えている。「ヨブ記」で使者たちがヨブに、牛、ろば、らくだが奪われ、子供たちと羊が死んでしまったことを告げたとき、ヨブは「主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」(Job 1: 21) と言って信仰心によって損失を受け入れる。ラーソンは、エスタが信仰心に強く持ち、損失(両親、容貌)を受け入れることをヨブの態度と重ね合わせて考えている。すなわち、ラーソンはどんな苦境に陥ろうとも信仰心を持ち続ける点で両者の一致点を見出している。[Janet Larson, “Biblical Reading in the Later Dickens: The Book of Job According to *Bleak House*”, in *Dickens Studies Annual* vol.13. p.42.]
- 17 Bert G. Hornback, *Noah's Arkitecture: A Study of Dickens's Mythology*, 86.
- 18 *Ibid.*, 86.
- 19 Andrew Sanders, *Charles Dickens*, 72.
- 20 ヒリス・ミラー (J. Hillis Miller) は、*Bleak House* によって、ディケンズは、大法官裁判所の改革あるいは廃止を読者に訴えただけでなく、人々が女性の居場所が家庭であり、女性の最高の天職が妻であり母であり、良い主婦になることだというヴィクトリア朝時代のイデオロギーを受け入れ、それに基づいて行動することを望んだ、と指摘している。[J. Hillis Miller, “Moments of Decision in *Bleak House*”, in *The Cambridge Companion to Charles Dickens*, 59.]
- 21 E.M. Forster, *Aspects of the Novel*, 85.

Works Cited

- Daleski, H.M. *Dickens and the Art of Analogy*. London: Faber and Faber Ltd., 1970.
- Davis, Paul. *Dickens Companion*. Harmondsworth: Penguin, 1999.
- Dickens, Charles. *Bleak House*. New York: Oxford UP, 1991.
- . *David Copperfield*. New York: Oxford UP, 1989.
- Fielding, K.J. *Studying Charles Dickens*. Harlow: York Press, 1986.
- Forster, E.M. *Aspects of the Novel*. Harmondsworth: Penguin, 1974.
- Gaskell, Elizabeth. *Ruth*. Harmondsworth: Penguin Books, 1997.
- Hill, James. “Vaccination and Smallpox”, in *Victorian Britain: An Encyclopedia*, Ed. Sally Mitchell. London: Garland Publishing Inc., 1988.
- Hobsbaum, Philip. *A Reader's Guide to Charles Dickens*. London: Thames and Hudson, 1972.
- Hornback, Bert G. *Noah's Arkitecture: A Study of Dickens's Mythology*. Athens: Ohio UP, 1972.
- Larson, Janet. “Biblical Reading in the Later Dickens: The Book of Job According to *Bleak House*”, in *Dickens Studies Annual* vol.13. Ed. Michael Timko, Fred Kaplan, Edward. New York:

AMS Press, 1984.

Miller, J. Hillis. "Moments of Decisions in *Bleak House*", in *The Cambridge Companion to Charles Dickens*. Ed. John O. Jordan. Cambridge: Cambridge UP, 2001.

Morris, Pam. "*Bleak House* and the Struggle for the State Domain", in *ELH* Vol.68. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 2001.

Newsom, Robert. *Charles Dickens Revisited*. New York: Twayne Publishers, 2000.

Reed, John R. *Dickens and Thackeray: Punishment and Forgiveness*. Athens: Ohio UP, 1995.

Sanders, Andrew. *Charles Dickens*. Oxford: Oxford UP, 2003.

Scott, P.M.J. *Reality and Comic Confidence in Charles Dickens*. London: The Macmillan Press Ltd., 1979.

Spilka, Mark. "Religious Folly", in *Twenty Century Interpretations of "Bleak House"*. Ed. Jacob Korg. Englewood Cliffs: Prentice-Hall Inc., 1968.

Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Martin Secker & Warburg, 1970.

戒能通厚、広渡清吾、『外国法』、岩波、1991.

出典：POIESIS (関西大学) 30 (2005)